

# 「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部  
創立10周年に寄せて

59

緑の山々に囲まれた見慣れた風景は、いつも私を安心させ、安らぎを与える。青年団活動で知り合った女友達の藤井さんは宮守の人で、そんな自然観を持つ。

すべてに心を奪われる。現実には夢を叶えてはくれなかった。「たっりゃ(だ)って、山にいて山に登る馬鹿がどこにいる」という夫・昭男と結婚したのは昭和三十五年のことであった。

よく二人で一緒に登山をしたが、藤井さんの影響もあって「結婚するんだったら、山の好きな人と」と自分で決めていた。

これまで早池峰山、経塚山、室根山、秋田駒ヶ岳に登った。何度登っても飽きない、また行きたくなる山は五葉山で、とくにあの原生林に魅了される。自然の力が創り出した木々、コケ、岩、その

昭和五十年ごろだったろうか。紅葉がとってもきれいな年であった。初めて夫が新車を買った年で、近くに住む登山仲間の高木ナツ子さんに運転

をお願いし、朝早く家を出た。秋田県の玉川温泉から後生掛温泉を越えたときのこと。「取ったばかりの運転免許で新車の運転、しかも山道。道路の下はがけ。足がガクガクしていた」と、いまもナ

ツ子さんは言う。友人をハラハラドキドキさせたあの時の見事なハイマツ、鮮やかな紫に咲き誇るリンドウがいまでも忘れられない。

五葉山へは住田町に住んでいながら住田側から登ったことがない。五葉山麓のあすなろ山荘から稜線に向けまっすぐ登る松山コース。植物の垂直分布がはっきりし、変化

に富み眺めのいいと言われる黒岩コース。それぞれ登ってみたが、その思いを叶えることが難しい峠になった。「それでも一回は」と思うのだが、自信がない。もう十年ぐらい前にな

ヒノキアスナロの姿も印象的。「また来たいよね。こんなにもすごい森があるなんて」と、参加者が驚きの声をあげていた。あらためて「緑」の多様さ、神秘さに感激してしまっ

た。五葉山に最後に登ったのは年号が昭和から平成に変わるころだった。その日は登山をしたくて

を取り戻したかのように青々としている。足元の小さな植物も生き生きしている。雨も雪も風もすべてが見事な眺めを創り出す源であり、そのこと自体が自然の営みであり、人為を許さない神秘さをもたらしている。どこまでも広がる空、大海原と入り組んだりアス式海岸、沢や峰、頂が多様な青さで覆われる山々。五葉山の頂上部か

## 山は人生の「伴侶」

住田町下有住 今野 ミヨシ

るだろうか。気仙地区の商工会女性部のメンバー五十人以上で、住田町上有住松山の紺野一郎さんの案内で五葉山森林浴道を散策した。

でも昼ごろに雨は上がり、あまり気の進まない夫をせき立てて、大船渡市側の赤坂峠へと向かった。頂上部はガスがかかっていたが、日枝神社から原生林を目指して進むと急にガスが晴れて視界が広がった。

遠くの山々の緑が精氣

らの眺めは、我を忘れさせてくれる。大きな感動や感激が自分を「無」にし、大自然に抱かれることの幸せをもたらしてくれる。山は私の人生の「伴侶」であると古希にして思う。

【執筆者プロフィール】一九三九年生まれ。住田町下有住在住。主婦。風景画を描くこと、踊りが趣味。「踊っているときが楽しい。ウーロン茶を飲んでも踊りたくなる」。

# リリー・エッセイ

五葉山へは住田町に住んでいながら住田側から登ったことがない。五葉山麓のあすなろ山荘から稜線に向けまっすぐ登る松山コース。植物の垂直分布がはっきりし、変化

に富み眺めのいいと言われる黒岩コース。それぞれ登ってみたが、その思いを叶えることが難しい峠になった。「それでも一回は」と思うのだが、自信がない。もう十年ぐらい前にな

ヒノキアスナロの姿も印象的。「また来たいよね。こんなにもすごい森があるなんて」と、参加者が驚きの声をあげていた。あらためて「緑」の多様さ、神秘さに感激してしまっ

た。五葉山に最後に登ったのは年号が昭和から平成に変わるころだった。その日は登山をしたくて

を取り戻したかのように青々としている。足元の小さな植物も生き生きしている。雨も雪も風もすべてが見事な眺めを創り出す源であり、そのこと自体が自然の営みであり、人為を許さない神秘さをもたらしている。どこまでも広がる空、大海原と入り組んだりアス式海岸、沢や峰、頂が多様な青さで覆われる山々。五葉山の頂上部か



昭和40年ごろの五葉山の原生林。手前が佐藤理智子さん。真ん中が筆者。後ろが夫・昭男(今はいない理智子さんの夫・竹夫さん撮影)